

バドミントン選手のスポーツビジョンに関する研究

A Study of Badminton Players' Sports Vision

1K06A0426

指導教員 主査 関一誠先生

江淵 愛美

副査 矢島忠明先生

【目的】

スポーツにおいてもっとも重要な情報収集能力は視覚能力である。特にバドミントンにおいて、ゲームの状況判断能力に優れた選手は、「よく相手が見えている」選手だと言われるのはこのためである。「優秀な選手であるほど視覚能力が高く、そうでない選手ほど視覚能力が低い」という結果が真下一策らによる日本卓球協会強化指定選手とユース代表選手の比較から得られている。そこから真下一策は、「視覚能力が高い選手は得られる情報が多く、その情報を活用する判断力・思考力もよく、逆に視覚能力の低い選手は得られる情報も少なく、判断力・思考力もそれに比例しているだろう。」と推論している。そこで本研究ではその推論に基づき、バドミントン選手を対象に瞬間視・周辺視・追従視・跳躍視の4項目の視機能に関する測定を行った。同時に、視機能に関する予備調査を実施し、その結果を比較することで、バドミントン選手における競技パフォーマンスとスポーツビジョンの関係について明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

早稲田大学バドミントン部13名(男子6名、女子7名)平均年齢20.2歳を対象とし、SHAP社製A4型PC「Mebius CS40L」の画面で、株式会社アファン製トレーニングPCソフトVer.2「脳で見る。動体視力」を用いて測定した。尚、周辺視、瞬間視の項目の評価はソフトによって10段階で評価されたものをそのまま採用した。

【結果・考察】

優秀な選手はよい眼を持っているのかもしれないが、視機能が良くないからといってよい選手ではないと判断してしまうのは危険である。視機能はおくまでもひとつの尺度であって、視機能によってスポーツの競技能力すべてが推測できるものではない。また、スポーツでは動くものを迅速にとらえ、正確に把握し認知する統合された動体知覚が重要な要素となり得る。そして、技術・体力・精神力の3つの要素が充実してはじめて優れたパフォーマンスが発揮できる。